「どっとねっと」5周年記念座談会

人のつながりを後押しする地域SNSのこれから

2006年９月、地域のコミュニケーションを活発化するため、当協会が北海道大学の協力を得て立ち上げたソーシャルメディアの実験サイト「どっとねっと」がまもなく６周年を迎えます。

昨今は従来のmixi型地域SNSにtwitterやfacebook、Google＋なども出現し、それらのすべてをSNSと呼ぶ動きも出ています。そのような流れの中で、自治体が運営してきた地域SNSが事業仕分け等で廃止に追い込まれるところが出てきました。

このような現状を背景にして、人をつなぐICT技術はどこへ向かい、地域のユーザーである私たちはどのようなツールを選択し、どのようにして社会的なつながりを維持していけばいいのかを議論しました。

今回は遠隔地の参加者にもGoogle＋を使ってWeb会議に参加してもらい、これにUstreamの中継画像と内蔵されたチャット機能を活用し、「どっとねっと」メンバーが感想等を書き込み参加できる構成としました。

出席者　（50音順）

小松　正明　氏　釧路市副市長
庄司　昌彦　氏　国際大学GLOCOM主任研究員
深田　秀実　氏　小樽商科大学商学部社会情報学科准教授
藤田香久子　氏　北海道大学専門研究員

ネット出席者

稲垣　順子　氏　幌延町在住
白鳥　郁子　氏　英国ブリストル在住
八幡　康貞　氏　静岡県在住

コーディネーター

草苅　　健　氏　（一財）北海道開発協会開発調査総合研究所所長代理（「どっとねっと」案内人）

草苅　北海道は全国でも人口減少と少子高齢化が進んでいる地域ですが、私たちが地域の課題解決のためのコミュニケーションツールとしてmixi型地域SNS※1を使った実験を開始したのが2006年でした。現在の参加者は約300人、アクティブライターが30人程度いて、ほぼ毎日書き込みされる方もいます。参加者の間では、

※１　mixi 型地域SNS
facebookなどの比較的新しいソーシャルメディアをSNS（ソーシャル・ネットワーキング・サービス）のジャンルに拡大して呼ぶ際、SNSの草わけ的存在だったmixiとタイプの似た地域SNSをそう呼ぶことがある。

地域SNSはソーシャル・キャピタルの醸成に役立ちそうだという合意が一応でき、「どっとねっと」はネットで集合知を形成しているのではないかというご意見をいただくなどして、まもなく6周年を迎えます。ソーシャルメディアの世界では、twitter※2が現れた後、間もなくfacebook※3が登場し、Google＋※4も新しい機能を提供し始めました。このような流れを背景にして、SNSの概念も、これら全部を包括するような状況になってきました。それに伴い地域SNSを取りまく状況もずいぶん様変わりしてきたといえます。

本座談会では、このような状況の中で「どっとねっと」のこれまでを振り返り、こういった機能をこれからどのように維持・発展させればいいのか、さらには新しいツールにどう向き合っていけばいいのか、意見交換したいと思います。

私のICT経歴

小松　ICT※5との出会いは、掛川市で助役をしていたときです。当時はまだブログ※6という言葉もなくて、テキストを入力すると文字のサイトが出来上がる「エンピツ」というサービスがあり、それを利用していました。その後にブログが出てきて、ブログで地域情報を発信していました。ところが、ブログは「待ち」の情報提供ツールで、なかなか外に打って出ることができません。そこで何かいいものはないかと思っていたころに出てきたのが、地域SNSでした。北海道に戻ってきたときに、SNS「どっとねっと」を立ち上げるという話がありました。当時、私は自分のブログで忙しく、ネガティブな対応をした記憶があります。でも、ブログと同じ記事を載せることで新しい出会いを求めてみるのもいいかということで、「どっとねっと」に参加しました。ブログは毎日更新していますが、それと同じものを投稿する形で、「どっとねっと」にも記事を提供しています。「どっとねっと」は特定のコミュニティーを対象にしていないところが特徴の一つではないかと思います。私はこれからはfacebookの時代が来ると感じています。その中で地域SNSのありようがどうなるかに非常に興味を持っています。

庄司　ネットのコミュニケーションを研究していますが、もともとは地域社会をどう運営していくのかということに興味があって、修士論文でも、ICTは地域運営のいろいろな手段のうちのほんの一つでした。したがってネット社会と実際の地域社会の両方の関係を見るようにしています。個人的には最近、twitterやfacebookに加えて、ブログを再開しました。それは、東日本大震災を機に、伝えたい人にいかに情報を伝えるかをずいぶん考えるようになったからです。twitterで届く人は限られているので、ほかの手段を組み合わせなければいけない。時には電波媒体や紙媒体、あるいは人が口づてで情報をどうやってリレーしていくのかも含めて、最近は考えるようになっています。今日のツールの使い分け、組み合わせという話題には、そういう観点から参加したいと思っています。

深田　私は2009年4月から小樽商科大学に勤務し、3年目です。その前は、15年ほど盛岡市役所の職員でした。最後の5、6年は情報システム部門にいて、地域SNS「モリオネット」を立ち上げました。小樽商科大学のゼミでは、「地域情報化論」というタイトルで学生と議論しています。私の専門は情報システム学で、ユーザー側というよりは、システム側あるいは運営者目線でモノを見ることに興味があります。さらに、手を広げ過ぎている感がありますが、行政情報システムや地理情報システム、それからモバイル系の観光情報システムに興味があります。最近は、地域SNS、twitter、facebookというソーシャルメディアが災害時にどう役に立つのか、特に関心を持っています。

藤田　私がインターネットに触れたきっかけは、退職

※2　twitter
インターネット上で、不特定多数の人に向けてごく短い文（つぶやき）を発信。他の人の文を読んだりすることのできるサービス。
※3　facebook
SNSの一つ。2004年、ハーバード大学の学生向けサービスとして始まったが、その後全世界に拡大。さまざまな情報共有機能をもつ。
※4　Google＋
Googleの提供するSNS。ハングアウトの機能を用いて、画像付き対話も無料でできる。
※5　ICT（Information & Communication Technology）
情報通信技術。IT（情報技術）とほぼ同義。
※6　ブログ（blog）
Webとlogを合わせたweblogの略。個人が自分の主張などを日記形式で書き込むインターネットのサイトやホームページ。

を目の前にした自分の老後ということでした。私は団塊世代ですから、これだけ大量の人が退職し地域で生きなければならないといったときに、団塊世代とICTがどう協調して生きていけるかを考えました。そこで大学院の門をたたき、シニアがどうコミュニケーションシステムにかかわるかを勉強しました。そのときに公共圏※7論を基調にシニアとICTを考えていったらどうかと思い、シニアネットを研究対象にこの10年間やってきました。私は、シニアがICT機器を使って何を語っているのか、何をしているのか、そしてICTを使うことによって活動がどのくらい変わっていくのかを研究対象にしました。

「どっとねっと」のこれまでを振り返る

草苅　Google＋で参加していただいているアクティブライターの３人の方々に自己紹介と「どっとねっと」５周年の感想をお聞きします。

白鳥　「どっとねっと」では、「みかん」という名前で参加しています。きっかけは５年ほど前、今勤めている会社のブリストルにあったオフィスがなくなって自宅勤務になり、一人で仕事をするようになったことです。自由時間もできて、日中話をする人がいないと寂しいということで、友人に誘われてmixiに入りました。最初はそんなに熱心ではなかったのですが、北海道の人と話をしてみたいと思い、コミュニティを探したら、いろいろ出てきました。草苅さんが始めた「北海道を語る中高年限定サロン」には、まだ誰も登録していませんでした。それで、草苅さんが管理人、私が第１号というのがきっかけでした。その後、草苅さんから「どっとねっと」に招待されて入ったら、雰囲気がよくて楽しい場所だとすぐ分かりました。それまで10年以上イギリスにいて、自分は変わっていないと思っていましたが、「どっとねっと」で会話をするうちに、自分がズレていると感じ始めました。こっちにいると、やはり感化され、こちらの常識が自分の常識になってしまい、それを「どっとねっと」でぶつけると、ほかの方が戸惑っているのを時々感じます。「どっとねっと」からの恩恵は計り知れません。

八幡　「どっとねっと」では通称「Helvetia※8」です。自分のアイデンティティーの問題だと思いますが、東京へ行って本州の人と付き合ってみて、自分はズレてると思いました。それが、ヨーロッパに行ったらあまりズレてはいない。日本に帰ってくると、やっぱりズレている。ズレの原因の一つは、北海道という地域の独自性にあると思うのです。ほかにない環境の中で育ったことが、ズレの原因だろうと思っています。それで、自分の発祥のバックグラウンドにある環境にもういっぺん接してみたかった。それが「どっとねっと」との今までのつながりです。

「どっとねっと」でいろいろ話していると、やはり北海道らしさを感じます。地域コミュニケーションにはいろいろなレベルがあります。ただ、隣近所をベースにした、昔の日本にあったような、みんながみんなを一応知っているというコミュニティは、今でもイタリアやスイス、ドイツにはありますが、日本にはなくなってきています。東京の下町にもあった地域共同体、そういうものを北海道に作れるような方向でSNSのコミュニケーションを考えることが、私にとっては一番大事なことではないかと思います。

稲垣　私は、自分の生活しているお寺や自分の活動のホームページを作りたいと思いましたが、作っても自分で管理できるか自信がなく、どうしようかと思っているときに、友人からmixiを紹介され、ホームページ代わりに使おうと思い参加しました。初めはとても楽しく刺激的で、友達もどんどんでき、面白いものだと思っていましたが、紹介者が若い人で、そのうち若い人とのズレを感じ、ついていけないところが出てきま

※７　公共圏
人間の生活の中で、他人や社会と相互に関わりを持つ時間や空間、または制度的な空間と私的な空間（私圏または私領域）の間に介在する領域。公共性概念の発現される社会的空間をさして使われるのが一般的。

※８　Helvetia
ローマ帝国がヨーロッパを占領したときに、スイス地方につけたローマ帝国時代の地方名。スイスみたいな地域に北海道がなってほしいという思いでつけたニックネーム。

した。そこで、中高年の北海道を活性化するというコミュニティを見つけのぞいているうちに、「どっとねっと」を紹介されました。

mixiよりも「どっとねっと」の方が、自分のしている活動やお寺の生活のことなどが気楽に書けます。しかも、たわいない内容、稚拙な文章でも、皆さんがコメントで意味付けしてくれます。それで、改めて自分の住んでいる土地や活動をにおわせることができるような感がします。

藤田　自分たちの「ズレ」と皆さんはおっしゃっていますが、そうした「ズレ」をどううまく伝えようかという思いが「どっとねっと」のコメントや、コミュニティにあふれていると感じました。だから、自分の常識もきちんと出せる。それにちゃんと反応があるから、その常識からもう一歩踏み出すという形が見て取れて、読んでいくうちにどんどん引き込まれていったような感じがしました。

小松　いろいろなサイトに同じような形で投稿していますが、「どっとねっと」は投稿者のレベルが非常に高い集団になっていると思います。書いていると自分が正しいと思いがちですが、やっぱり人間は多様なのだということを改めて思い知らされることも多く、有意義なやり取りや情報が得られる集団になっているのを面白く思います。その一方で、書く方やコメントしてくれる方も決まってきました。５年間やっていく中で段々一つの型に収れんしつつあるという印象が強く、このまま居心地がいい空間のままでいいのか、この内容をもうちょっといろいろな人に見てもらいたいとまで思うのか、その辺でまたいろいろな意見があると思います。

草苅　ソーシャル・キャピタルには、橋渡し型と結合型がありますが、「どっとねっと」というコミュニティの中に５年ぐらいいると、どうも血が濃くなって、結合型のソーシャル・キャピタルのようなところに入ってきていると感じている方もいると思います。

庄司　twitterなどを見ていると、ネット上で立場の違う人が議論して合意に至るというのはすごく難しいと感じます。ある程度同じものを共有している人同士であれば共感しやすいのですが、今だったら、原発の話のように、立場の違う人同士だと、どうしても対立が先鋭化してしまう。だから私は、ネット上で「熟議」をするのは無理だという立場をとってきました。

ところが昨年、ヨーロッパで地域社会の自治や民主主義について調査をしまして、いろいろな方々にお話を聞いていくと、私の判断は性急なものだったことに気がつきました。安易に多数決に走らず、何年もかけて議論を重ねて一つの結論に至るという話をたくさん聞きました。「どっとねっと」の議論はそれに近いという印象を受けました。参加者は少ないとしても、大変知的で、じっくり、どっしり構えた議論が展開されていると思います。たくさん人が入ってくると大変なこともあると思いますが、そもそも熟議をする習慣が私たちにあまりない中で、ここにはそのにおいがあるという印象を受けました。

深田　システム側の視点からいうと、「どっとねっと」では「OpenPNE」というSNSエンジンを採用しています。全国を見ると、もう一つ「OpenSNP」というSNSエンジンがあり、あとは総務省がかかわっている「Open gorotto」というものがあります。OpenSNPやOpen gorotto系は、情報発信型の地域SNSで、中に入らなくても、中の人が「これは情報発信したい」というものはトップページにどんどん出てくる仕組みになっています。

OpenPNEは、中に入らないと情報が得られない、トップページだけを見ても何も分からない情報内在型の地域SNSです。ただ、OpenPNEを採用しているSNSは、あまり積極的に情報を外に出さなくてもいい、それよりも中のコミュニティを大切にするという感じです。「どっとねっと」はまさしく、ここ何年かかけて、内部での居心地のよさを大事にしながら収れんしてきている状況にあるのだろうと思います。今後、どうするのか。それが情報発信型に行くのかどうかは、もちろん内部の方々が方向性を考えればいいと思うのですが、システム側から見ると機能面でそれぞれ特色があ

る方向に進んでいっていると思います。

mixi型地域SNSからfacebookへ

草苅　庄司さんの「地域SNS研究会」が、昨年facebookにグループを作ったら、どっとなだれ込んで、元のSNSの方は、閉じましたね。facebookの中に作ったグループがものすごい書き込みで、読みごたえもある。地域SNSをこういう座談会で考えるのと同じように、それをfacebookで実際やっているという状況は、実は各地の管理者レベルの人が参加しているせいでしょうか、緊迫感のある議論が活発にされていると思います。mixi型の地域SNSが、次世代型のツールの方に移行しようとしているのでしょうか。

庄司　そのとおりだと思います。５、６年前の段階では、OpenPNEを使って地域のソーシャルネットワークを作ろうというのは一番合理的だったと思います。ただ、５、６年たつと、ICTの世界は状況がだいぶ変わります。ユーザーの層も厚くなりましたし、シニアの方々も入ってくるようになりました。携帯電話からアクセスすることが当たり前になりました。それから、twitterが出てきたことも相まって、コミュニケーションのペースがすごく速くなりました。何か書いて、１日待ったら一つコメントが付いていたというスピード感ではなくなってきています。

「どっとねっと」のようなOpenPNEによるSNSが役割を終えたというよりは、違うものが出てきて幅が広がったといえると思います。twitterはtwitterでものすごく特徴がありますし、facebookはfacebookで明確な実名性などの特徴がある。人には地域のつながりもありますが、それ以外のつながりもありますから、置き換わるというよりは両立しうるものでしょう。

今、地域で人をつなぐのだったらfacebookに行けばいいのか、それでファイナルアンサーかと言われると、そうでもないと思います。今の話の延長でいけば、３年後、４年後、５年後、facebookもどうなっているか分からない。twitterは日本では2007年ぐらいからユーザーが増えていますが、３、４年前は全然使われていませんでしたし、facebookは聞いたこともありませんでした。リアルな人のつながりはどこにあるのか、人をつなげて何をしていくのかということを考えながら、ツールを使い分けていくということがいいのではないかと思っています。

小松　私は、mixi型の地域SNSは減っていき、多くがfacebookに流れていくのではないかと思っています。この数年間のICT環境の変化はものすごく大きく、facebook やGoogle＋の登場で、匿名性による表現の限界に参加者が気付いてきて、匿名とはいえ地域SNSは仲間内だから罵詈雑言（ばり）やデマは飛び交わないですが、広がりがなかったり、誰なのかがよく分からない。誰が読んでくれたのかも分からない。

ところがfacebook上だと、誰が読んでくれたのかも、「いいね！」ボタンで賛同も分かる。グローバルなSNSは今まで地域SNSでできなかったことがシステムやツールとしてできるようになる可能性を次から次に提供してくれている。そのスピード感を支持する人が多いのではないかと思います。その上で、匿名より実名でいい、自分もそっちに飛び込もうという人たちが出てきた。それを私は「ネット覚悟」とか「ネット・イニシエーション[※9]」と言っていますが、ネットで自分の素性をさらして発言するという、通過儀礼を超えている人が増えているのではないかと思います。そういうことを思い合わせると、グローバルSNSが次から次に新しいものを提供してくれる社会に、ものすごく可能性を見出しています。

藤田　匿名性がネットのコミュニケーションの基本にあったと錯覚している人が多いですが、ネット上であれ、現実の社会であれ、自分が言っていることをきちんと表明していくことがこれからは必要になってくるのではないかと思います。自分の言いたいことを相手に伝える自由が、facebookで自分を表すことで担保されるならば、自由は実名であっても担保されるのでは

※９　イニシエーション（initiation）
特定の集団に成員として加入する際に行われる儀礼。

ないかという気がします。世の中はそっちの方に動いたという感じがします。だから地域SNSが閉鎖的だとも思わないし、どんどん広がる可能性もあるし、それから絶対にfacebookでなければならないということでもありませんが、発言の場がより熟議の民主主義みたいなものへ発展するためには、facebookもあっていいという方向で進むのではないかと思います。

深田　私も、大きな流れとしては地域SNSというローカルなSNSから、facebookのようなグローバルなSNSの方に移っていくのではないかと思っています。ただ、ローカルなSNSが地域と密着して動いているところであれば、結構残っていくのではないでしょうか。地域SNSは全国に500ぐらいありますが、ほとんどは動いておらず立ち枯れ状態と言われています。でも、元気にやっているSNSはまだ残っていて、そこにはうまくいっている理由があります。そのSNSは、その状態を保ち続けていくでしょうから、徐々に広がりを持って、いわゆる「顔の見える関係」の中で健全に発展していくのではないかと思います。結局、どういう状況で、どういう情報が欲しいか、使い分けみたいなところで幾つかのID[※10]を持って動いていくのかな、という気がしています。

アクティブライターがみるfacebook

稲垣　facebookに登録はしましたが動かしていませんでした。私の場合、田舎に住んでいて、情報発信をしたいという半面、広がりよりも深さの方をじっくり見られる場にいるのに、また新しいものに手を出してしまっていいのかというのもあって、facebookはそのままだったのです。それが、たまたま今年のお正月に娘の会社の方が遊びに来て、facebookを見て「友達になってくれませんか」という連絡が来たのです。それからは、あっという間にものすごいスピードで広がっていったのです。予想はしていましたが、ちょっとしんどい部分も実はあります。「どっとねっと」の場合は６年目ですが、私はまだまだこれから本当に深まっていくのではないか、個性的なところがすごい魅力だと思っています。自分にはfacebookはちょっとしんどくなっていくという感じがあります。

白鳥　私は基本的にはSNS人間ではないと思ってやっていますが、facebookもそれほど熱心にやっていませんし、むしろ欠点の方が見えているというか、あそこには自分のニーズがないのです。何人かの友達とつながっていたいという、それだけのニーズでやっているので、それ以外のものはうざったい。友達の友達になった人から毎日、「今、駅で電車を待っている」のような記事が入ってくると、それを読んだだけで「２秒無駄にした！」みたいな感じです。料理や子供の写真を上げられても、黙殺の方が多いのです。そうすると、黙殺してはいけないのではないかという罪悪感もあったりして、facebookがぴたっとはまらないというのが現状です。

八幡　facebookは、全くお願いした覚えもないのに、何十人もお友達を「いかがですか」とか言ってくる。「人の売買をやるのか、おまえは」と言いたい。これはfacebookの戦略で、何回も何回も無視していると、そのうちの何人かが「あなたのお友達です」と言ってくる。これはプライバシーの侵害で、誰を友達にするかは自分で決めたいと、私は思います。あれはちょっとうるさいです。コンタクトすれば確かにいいことなのですが、ローカリティのけじめをなくしてしまうのはやっぱりまずいのではないかと思います。その点、「どっとねっと」は、本当のローカルな北海道と関係のあるものを軸にして話をし、それでコミュニケーションをとる、考え方を交流させるというネットが、実際にグローバルに機能しているのです。「どっとねっと」は、アクセスできる人の資格をもっとはっきり決めた方がいい。と同時に、入りたい人は相当自由に入れるような態度も示しておく必要があります。ローカルでかつ

※10　ID（identification）
識別子。コンピューター・ネットワークなどでユーザーや機器を識別するための符号。

オープン。今流の表現で言えば、ローカリティとグローバリティとをつないだようなものが必要ではないかと思います。どうもfacebookには世界グローバル支配戦略みたいなものがあって、そっちの方へシステム全体を動かしてドライブしている傾向がある。それらは私の欲求と全く相入れないということで、ツールとしては使いますが、使って楽しい思いができるとは想像できません。

これからのコミュニケーションツールの選択方法

草苅　ツールにはプラス・マイナスがあります。例えば「どっとねっと」はOpenPNEというソフトに乗っていますが、それをやめて別のものに乗っていってもいいのではないかという声がある一方、今のソフトにはそれなりの意味があるのだからこのままでいこうよという人もいます。そうなると、乗り移っていく人、このまま残る人など分散していく可能性が出てきます。それから出てみたが、従来の地域SNS、mixi型に戻ってくるとか、あるいはもっと深く戻って、やっぱりメーリングリストでいいのではないかという声もないとは限らない。庄司さんのところのOpenPNEのSNSからfacebookへの移行はいい例ですが、コミュニケーションツールの選択の方法をさらに具体的にお聞かせください。

庄司　ツールを乗り換えて、明らかにコミュニケーションが活発になりました。地域SNS研究会は、各地の地域SNSの運営者の方々が参加するSNSですから、その方々にとっては自分の地域SNSが一番大事で、研究会のSNSは重要度が低いわけです。だから、わざわざ研究会のSNSにログインしに来てくれる人はなかなかいませんでした。それをfacebookという、皆さんが常駐している場所へ移したことによって、アクセス数が増え、書き込みの頻度がものすごく上がりました。以前よりもいろいろな話題が共有できるようになって大変よかったと思っています。

　ただ、困っていることも少しあります。管理人としては、OpenPNEだと、ユーザーの行動履歴やプロフィールが管理画面から全部見られるし、いつログインして、どれぐらい使っているのかがよく見えましたが、facebookでは管理できない。分からなくなってしまったのです。また、将来、facebookが衰退しあまり使われなくなってしまった時に、いま議論しているログデータを引っ張り出して、次のSNSに持っていくことができないのです。データベースがfacebookに握られてしまっているところが、もしかしたら将来的に何かの制約になるという懸念を持っています。

小松　ネットは、コミュニケーションツールとしてお互いがつながっているという前提がないと役に立たないと思います。地域SNSは、誰が見てくれるのか信頼性が足りない。しかしfacebookは、たくさんの人が見てくれているという安心感がある。ネットはつながりをメンテナンスしないと細ってくる。だから使いやすくメンテナンスコストがかからない方に流れやすい。ただし、そういうものに参加するとメンテナンスに対するコスト、負担も大きくなってしまう。そこで得られるメリットと、自分がコミュニケーションをメンテナンスする労力との差がある。今はfacebookにはまだメリットの方が大きいと感じています。

白鳥　「どっとねっと」の強みは、クローズされた世界ということです。私、facebookにフレンドはたくさんいませんが、たくさん持っている人がいて、その人が何かを書くと「いいね！」ボタンが100とかになっている。そうしたら、自分が「いいね！」ボタンを押しても押さなくてもいいのではないかと思ってしまいます。「どっとねっと」にはそういうものがなく、クローズの世界の良さ、匿名ですが半熟という、その辺が大きな違いだと思います。

小松　ウエット感を心地良いと思うか、さらっとした方がいいと思うか、個人で違います。そこでの付き合いの感覚はこれから学んでいかなければいけないリテラシー※11の一つかもしれません。「いいね！」と押してくれる人が必ずしも支持してくれる熱心な参加者にならないということがわかってきました。どこかで切

※11　リテラシー（literacy）
ある分野に関する知識やそれを活用する能力。

る覚悟というか、これ以上は受け付けません、「友達」と言われても「あなたを知らないという覚悟」も次には出てくるような気がします。あるいは、つながったがコミュニケーションが増えないのだったら「つながるのやめましょう」ということがあっても良いと思います。

草苅　ツールの選択には、「乗り移る」ということをイメージした話の持っていき方もあると思いますが、もう一つは、いいところを全部つまみ食いして使うという、限られた時間の中で渡り歩いて、いいとこ取りをする方法もありますよね。

稲垣　私も今、自分の力量と目的で自分にとってのいいとこ取りをして渡り歩いています。話は違いますが、mixiの匿名も、ちょっと疾患を持っている場合の情報交換など、匿名の方がコミュニティではやりやすいのです。だから、匿名がすべて駄目とは思えなくて、本当にいいところを探ってやっています。

深田　今、目の前のパソコンでfacebookを見ています。ちょうどリアルタイムで、東京大学の空間情報科学研究センターの今井修先生が、グローバルとローカルな地域SNSの話のところで、「ローカルのSNSといっても、実は住民の一部しか使っていない。だからローカルなSNSをもっと使っていけば、地域全体に視野を広げる場として役割がまだまだある」と書き込んでいます。うまく使われているところは使われていますが、立ち枯れといわれるところはそこがうまくいっていないのではないか思います。

ただ、私は新規にいっぱい人を集めると活性化するということには懐疑的です。それよりも、中に入った人をいかに活発化させるかが運営者としては重要です。そういったことを含めて考えると、私も選択の方法のところで渡り歩いている感じです。私は、自分が必要とする情報収集にtwitterを使っていますが、その中ではあまり発信していません。情報学の人たちは「情報の粒度」と言いますが、細かくて深い情報は、居心地のいいネット空間、つまりローカルなSNSの方から取ります。広く情報を収集したい場合は、facebookやtwitterの方がフォローしておけばどんどん入ってきます。必要なときには自分でも発信しますが、基本的には情報収集ツールとしてのtwitter、facebookという感じです。

草苅　今のお話で示唆的だと思ったのは、新規参入ではなくて、今いる人を充実させるということでした。ある社会学の先生に「どっとねっと」の概要を話したときに、これがほとんど口コミで広がったということに驚かれました。今どきのネットで入ってきた人は、すぐ抜けていく。残っている人はほとんど誰かの紹介で入ってきていますから、基本的に匿名というのはない状態です。

八幡　これは非常にいい形ではないかと思います。つまり、昔の隣近所の井戸端会議、職場でお茶を飲むときに交わす会話というような日常的なレベルでの、ちょっとしたコミュニケーションを通して「どっとねっと」に人が入ってくるわけです。それは、社会学的にいえば、人が社会的アイデンティティを日に日に確かめ、かつ日に日に新しく作っているということです。そういうフローが持続しないと、社会の人間的な結合はなくなってしまいます。だから、口コミで入ってくる人がいて、そういう人が少しずつしか増えないけれども、そういう人がいつまでもいるのは非常にいいことだと思います。ほかのメディア、ほかの手段では実現できない、自分とほかの人とのある程度のしっかりした関係を通じて、自分が誰であるかを客観的に認識できるという、非常に貴重な成果があると思います。そのことは普通、表立って議論されないので、重要な観点だと思います。

これからのSNSに向けて

白鳥　私の現在の目標は、「リア充（リアルが充実）」です。そのためにソーシャルネットワークを使おうということです。逆ではないです。時間がないのが私の最大の問題で、人と会えない部分をネットで埋めてきたのを、逆にしなくてはいけないと考えています。

八幡　コミュニティ内部の厚みを増やすことと同時に、外に対してもオープンにする。ただオープンの仕方にいろいろ工夫があって、本当に入ってほしい人、入りたい人には入ってもらう。けれども、それにはやっぱり一定の条件があります。つまり「北海道」ということをもう少し考えて、単なる田舎の小さいグループではなく、同時にグローバル性もあるというオリエンテーションも持っているSNSにしていきたい。

稲垣　自分の力量と目的に照らし合わせながら、バランスよくやっていきたいと思います。もちろん地域活性につながるように、あまり欲張らないでやっていきたいと思います。

藤田　現代だからこそネット上にコミュニティがあるということで、これをどう使うか、新しい付き合い方を学んでいかなければならないと思います。まだ学習過程にあると思います。ツールにしても、コミュニティ環境にしても、これからどんどん発展していく余地があります。それで「どっとねっと」は、そのモデルケースになりうると思っています。新しいコミュニティの在り方のいいモデルとして提供できるのではないでしょうか。そういう発達の仕方をしてきたので、新たな発展の仕方も、参加している人の意思で決まってくると思います。

深田　「どっとねっと」に限らずソーシャルメディア全体として、今回の震災を踏まえて言いますと、平常時に私たちはソーシャルメディアを使い、コミュニケーションしていますが、災害時にはそれがさらに役に立つということが、いろいろなところで取り上げられています。常日ごろ使っているツールこそ、いざというときに役立つのです。日ごろ使っていないものは、緊急時すぐに使えません。ソーシャルメディアは、普段コミュニケーションをとっている者同士で使えばいざというときに役立つということです。「モリオネット」は、３月11日の地震発生直後は停電の影響があってすぐには使えていないのですが、２日後からは関連コミュニティが立ち上がって情報交換していました。メンバーの安否確認から、盛岡市内のライフラインの状況、当時非常に困っていた、ガソリンがどこで手に入るかといった、粒度が細かくて深い情報まで活発に交換されています。

その中で「20年後の未来のために」という副題が付いている被災した小中学生のための「学び応援プロジェクト」がモリオネットに立ち上がり、全国の地域SNSが連携して動き出しました。平常時にしっかり使いながら、いざというときにも役立つソーシャルメディアが、今後、非常に大事になってくると感じています。

小松　普段から使っているからこそ、いざというときに使えると思います。そのためにもやはり、自分も使えた方がいいという価値観を持つことがネット世代の若者には当然と思われていますが、社会人には当然のスキルです。だからリテラシーやマナー、ルールが醸成されていくべきだと思います。地域SNSも地域の仲のいい人たちで教養を高める場とすることと、たくさんの人とつながっている場とすること、この両方を使い分けていくことだと思います。

ただ、ネットにどれだけコストをかけているかを自覚する必要があります。それで一体何を得ているのか。ネットコストとネットから得られている情報を24時間に照らしてみた方がいいと、今日改めて思いました。

そういう意味で、使命感に燃えて情報をサービスするのも本当に良いのか。今日の議論の中で「量的拡大、人数的拡大だけが価値ではない」と感じました。

庄司　私も、「量的拡大」「心地のよい範囲」、所属しているコミュニティとの「ズレ」という言葉が、ずっと気になっていました。それをちょうどいいものに自分の中でどう設定するのか。自分が気持ちいいところにだけいると、そのままでは発見がありません。その範囲の設定やコミュニケーションの仕方にはツールが影響している部分もあって、ツールと目的とを照らし合わせて、常にうまく選んで組み合わせていくことができたらと思います。大事なのはツールではなく、どこまでどの情報を届けたいのかということだし、誰とどのくらい、どのようにつながっていたいのかということだと思います。ツールが変わってもつながり続けたい人はどうなのか。ネットとの関わりをいったん置いて、そういうことを考えてみる必要もあると思います。そういう意識を持ちながらツールのことも考えてみることが大事です。

＊

草苅　「どっとねっと」は、地域SNSを使って北海道の地域の活性化につなげていくために、ソーシャル・キャピタルを片方で意識してやっていこうということでした。人が地球上にいる間は、このテーマはエンドレスに続くと思いますし、当面はICT、ソーシャルメディアのニーズは尽きません。そういう意味では、ツールの開発も発展の途中という感じがします。こんな折に６年目に入った「どっとねっと」のこれからを占ってみる必要もあって、今日の座談会を開催しましたが、幅の広いご示唆をリアルの札幌のフロア、そしてGoogle＋で遠隔地の双方からいただけたと思います。ありがとうございました。これからもアドバイスやご示唆をいただいて、続けられる間は実験をやっていきたいと思いますので、よろしくお願いします。

（本座談会は2012年１月22日に札幌市で開催しました）

profile

小松　正明（こまつ　まさあき）
室蘭市生まれ。北大農学部を卒業後、公園技術者として北海道開発庁、建設省、国土交通省で公園・緑地行政に携わる。静岡県掛川市助役赴任中は生涯学習まちづくりやスローライフ運動を牽引。地域SNSとして「どっとねっと」、「日刊ブログ新聞『ぶらっと』」に参加しているほか、まちづくりブログ「北の心の開拓記」を運用中。

庄司　昌彦（しょうじ　まさひこ）
東京都生まれ。中央大学大学院総合政策研究科修士課程修了。内閣官房IT戦略本部電子行政タスクフォース構成員、一般社団法人インターネットユーザー協会（MIAU）理事、NPO法人政策過程研究機構理事なども務めている。おもな関心分野は情報社会学、政策過程論、電子行政、オープンガバメント、地域情報化、ネットコミュニティなど。

深田　秀実（ふかだ　ひでみ）
岩手県盛岡市生まれ。1990年岩手大学大学院工学研究科修士課程修了。1999年同人文社会科学研究科修士課程修了。2008年岩手県立大学大学院ソフトウェア情報学研究科博士後期課程修了。博士（ソフトウェア情報学）。2009年より現職。専門は、情報システム学（特に、地理情報システム（GIS））。盛岡市総務部情報企画室在職当時、盛岡市が設置・運営する地域SNS「モリオネット」を立ち上げ、運用管理を担当。最近は、自治体GIS、観光情報システム、ソーシャルメディアなどに興味を持ち、教育研究活動を行っている。

藤田　香久子（ふじた　かくこ）
江別市生まれ。1969年日本女子大学文学部英文科卒業。2003年北海道大学大学院国際広報メディア研究科公共伝達論修士専攻修了、11年同研究科博士課程修了。博士（国際広報メディア学）。論文「シニアネットにおけるコミュニケーション空間―親密圏と公共圏の架橋」「オンライン・コミュニティのコミュニティ性を問う―米国 SeniorNet と ThirdAge の現状からの一考察」「シニアネット研究―定常型社会のネットワークと親密圏、公共圏、コミュニティ」。

稲垣　順子（いながき　じゅんこ）
釧路市生まれ。道北サロベツ原野にある寺院に住み、お寺が心休まる場所であるように、との思いをベースに自然体験やコンサートを開催。子ども対象の日曜学校は30年余り続いている。一緒に探す地域のお宝は増える一方。「ちょっと不便、ちょっと足りない」という田舎の暮らしを楽しんでいる。

白鳥　郁子（しらとり　いくこ）
砂川市生まれ。現在、イギリス南西部にあるブリストルという町で、ソフトウェア会社の社員として翻訳をしながら生計を立てている。イギリスには、語学留学のために来た1992年の秋から住んでいる。現在は、将来に向けて、日本への帰国をどう成功させるかを色々と思索中。

八幡　康貞（やわた　やすさだ）
小樽市生まれ。上智大学で哲学を学んだ後、1960年ドイツに渡りミュンヘン大学で社会学を専攻する。1977年帰国以来定年まで大学教員となる。ITとの関わりは、30年程前に、JW-1（東芝）を始め、数年後には初代Mac（128K）、以来Macユーザーとなり、季刊誌Swiss-Japan Journal（SJCC チューリヒ発行）をインターネット経由で共同編集する。

草苅　　健（くさかり　たけし）
山形市生まれ。1975年北大農学部卒。1976年、苫小牧東部開発㈱に入社し、インダストリアルパークをめざした苫東工業基地の緑地保全管理、景観形成、広報に従事。1998年㈶北海道開発協会に入社。はまなす財団への出向を経て2010年７月から現職。ホームページで「雑木林&庭づくり研究室」を主宰し、この活動を核にして、苫東勇払原野の保全と利活用を担う苫東環境コモンズを設立し、2010年１月、NPO法人認証。技術士（環境部門）、NPO法人苫東環境コモンズ事務局。